

俄羅斯紀聞三集

屬附學大田稻早
館書圖

寄第 川田氏寄控

654.

第 20

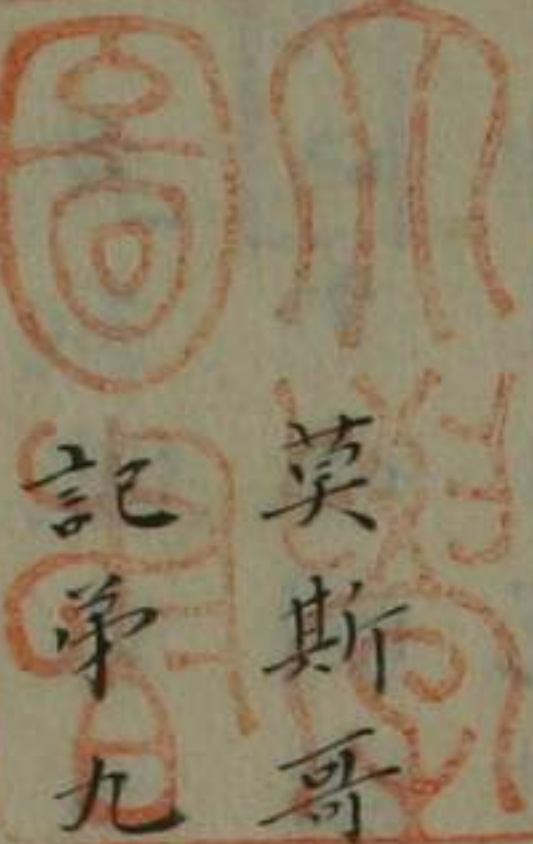
第 2 2994

出帶許不外 23





釣遠探隱要録卷二



莫斯科未亞韃韃 莫斯哥未亞韃韃 莫斯哥未亞韃韃

記第九

莫斯科未亞韃韃ノ諸州

其二ハ王国莫尔加爾ナリ其地亞私大脈甘ノ上ニ

ア夕リテ北ニ上ニハ北ニ方ニ畫クエハ地ニ固ク高ル

加河ノ右東ヨリ云アリコレ翁加里亞國ノ属部

步尔葛利亞ト名ハ相似テ其地ハ別ナリ

九 其ノ属ラソラト



其疆界北ハ王國加山ニ界ニ南ハ亞私大脈甘
ニ接シ東ハ加爾謨後ニ至ル此國人ヲ古ヘノ
世ニハサホルキイルスト名ク自立ノ君アリ
世ニコレヲ称シテゴロオトケイセル大帝ト云
ル義ナリ
ト云其後魯西亜ノ大君ヨハシ子スバシリウ
スニ併セラレテ今ハ遂ニ魯西亜ノ郡縣トナ
レリ地圖或ハ云ク昔ヨリメ此國都モ亦莫尔
加耳ト號セリト然レモアウヂフレトト云人
ノ詳説ニ云此國古ヘ自立ノ主アリシ時ハ國

中敢テ城郭州縣ヲ設ケズ國人スベテ皮帳ヲ
家トシ遷移シテ定居スルトナカリシト云

其三

其疆界北ハ止白里ニ至リ南ハ莫尔加耳ニ界
ニ東ハナガイセニ接シ西ハケセレミツシニ
連リ高尔加河カム河カサンカ河及其他多ク
ノ河水其國中ヲ通流ス此地甚豊饒ニノ其土
人ノ風俗ハ他ノ韃靼ノ人ニ比スレハ多ク修
整ナリトス皮革ヲ夥シク他邦ニ交易ス此國
二

古ハハ自立ノ汗繼祖ハ汗其王アリテ其衆
蕃盛ニ我ニ臨ム毎ニ精兵六萬人ヲ出ス恒ニ
莫斯科未亜ノ邊境ノ患ヲナシテ戦争ヤハ亦
リシカ其後遂ニ莫斯科未亜ノ大君ニ供セラ
レタリ其事詳ナリ
加山即其國都ニカカシカトスル河水コレ
ヲ繞ル此國都ノ名ニ因テ總國ノ名ヲ亦加山
ト號ス其城小阜上ノ平地ノ地ニ造建シテ北
極出地五十五度三十八分ニアタリ宏大壯麗

ニノ高賈漆會ニ東方諸州ノ貨物ヲ貿易ス此
府ノ周匝皆土以テ封疆ヲ築キ其上ニ木ヲ以
テ郭トナシ高臺及ヒ府内ノ人家皆木ヲ以テ
コレヲ造營ス然レモ其城ハ皆石ヲ以テコレ
ヲ築キ多クノ大砲ヲ列置テ規制堅固ナリ今
此城中ト城外ノ府内トニ各一員ノコウヘル
子ウル官名都ヲ置テコレヲ治メシメ府内韃
韃及莫斯科未亜ノ人聚居ス而シテ其韃韃ノ人
ハ莫斯科未亜人ノ許シヲ得ルニ非レハ敢テ

城内ニ入ルヲ能ハズト云此國都千五百五十
二年日本天文二十一年ニ莫斯科未近ヨリコ
レシ併セ取りタルナリ

其四

ハ公國ウ# アドスケイナリ其地シラニ
イ東魯一西上六部ノ東南ニアタリウ# アトカ
ト云ル河水横ニ其中シ流レテカム河ニ合ス
其ウ# アトカ河ニ傍テ府城アリ亦ウ# アト
カト云一員ノビスコフ官備コレニ居ル此城ハ
コレ莫斯科未近ヨリノ昔時韃人ノ入寇ニ備

フルカ為ニ所築ニノ加山ノ地ヲ去ル丁九回

其十

里八十本ノナリ

其五

ハ王國止自里ナリ其地東方ニ向テ北韃韃

其六

ノ地ヲ悉シテ支那ノ界ニ至レリ詳ニコレシ

後ニ説ク即チ下利ノ界ニ至リ詳ニ二十篇ニ

其六

ハ甘毛エナリ其地北方ニアリテ氷海

ニ臨ナリ此地ノ下ノ第一

上ニ云魯西亞國ノ四大部ノ其第四ハ莫斯科未
近皮亞ナリ其地白海上ニアリテ雪際亞國

ノ界ニ至レリ其中分テ三部トス

其一 ハモウレ^シスコイ^レホリ^イナリ其地西

北ニアリテ中ニコラト名クルノ地アリテコ
ラト云ル河ニ向ヘリ此処ニ和蘭及ヒ露^ル厄^リ利^リ
亜ノ人時々来リテ交易シテス

其二 ハ^テル^スコ^イレ^ホリ^イナリ其地ノ西北ハ

皆白海コレヲ廻レリ

其三 ハ^ベフ^ラモ^レス^コイ^レホ^リイ^ナリ其地テ

ルスコイ^レホ^リイ^ノ南ニアタリテ其間一ノ

海灣ヲ以テ其界ヲ分ナリ此地最荒曠ニノ人
跡少レナリ故ニ其地理ノ如キモ亦多ク詳ナ
ラス

○北高海ノ記事第十

北高海ハ^アス^ラカン^ハ亞^ス松^ラ大^ラ脈^カ甘^シノ地ニアルノ海ナルカ故
ニ前篇^ハ亞^ス松^ラ大^ラ脈^カ甘^シノ條ニ亦此海ノ事ヲモ説ク
ト雅^ニ尚^ク其詳ナルヲツバ記^サハ^ルカ故ニ此ニ
又別ニ一篇ヲナシテ此海ノ事状ヲ詳ニシテ以
テ後学ニ便リスルヲ如シ

十 北高海

抑此海其周廻多クハ亞細亞洲ノ地ニ係リテ則チ百兒西亞大韃靼莫斯科未亞日阿爾日亞諸國ノ地ニ傍ヘリ是ヲ以テ諸國ノ人ノ所呼此海ノ名一ナラズ古一ノ世ニホカルト云人ノ所著ノ書ニハ「コレコナルト名クコナルハコレ「ガナル長子ナルハ太古ノ聖人諾慮ノ孫ニ」其子孫種族高ル加河辺ヨリ此海辺ノ地ニ居ル故ニ如此ニ名クトリ則チ「ハ羅甸諸海十」後「百兒西亞」ノ人ハ呼テ「キユリユム」夕

ガリス夕ト云ヒ「一州ニシテ此海辺ノ地」又「知ア口キラン」此海ニソノ「魯西亞」ノ人ハ呼テ「ルヤキユリユム」ト云「キユアレンスコイモレ」ト云コレハ喜ル甘海ト云ル義ナリ喜ル甘ハ國名ニ傍ノ地ナリ百兒西亞又モオレン「都兒格」ノ人ハ呼テ「ボハルゴルシユ」ト云コレソ和蘭語ニ譯スレハ「ベスコオレン」ト云ル義ナリ和蘭語ニ「ベスコオレン」此海ノ塞ナ

面皆諸國ノ如地コレヲ圍繞ルベテ湖ノ如ク
ナシルヲ以テ如此名ク九ノ十ニテハ
勅奈西ノ人ハ呼テカスビアタラツセト云羅
甸、詰ニテハカスビウム又コレヒルカ
ニエムト云フ語海ナリ和蘭ニテ古ハ此
海ヲヒルカアンセエ、ヒルカニア國又セエ、
ハシアスタラカン海ト云義ナリト云今ハ多
ハカスビエセエト稱スルナリカスビエハ古
此海ト云アリ蓋明人所謂ノ
澤石ナリ其説下ニ記ス所謂ノ
此水上ニ云フ如ク古一ヨリ既ニ海ト名クトイ

ハ氏其實ハ海ナルヤ大湖ナルヤ疑フ者アリ
而ノ多クノ先哲、才子并シウス、アレキサン
テリニユス、ホムボニウス、ナラプリニウス、
リニユス、スタラボバシリウス、ゴグニユス、
名等所撰ノ傳記ニハ皆以テ海ナリト定ナリ
然レ氏コレ人、確實ニ此水ノ状ヲ自ラ詳ニ
メ如此ニ記シタルニハ非ス蓋皆先人ノ所記
ニ因循シテ海ト記ス、ミ又アリストテレス
及、ヘロドテユス、人共名ノ所記ニハ皆以テ湖ナ
七

リトス如何トナレバ此水散ラ他ノ海水ニ通
スルヲナケレバナリ据ニ利瑪竇北高海此水甚浩
湖蕩不通其水鹹則姑得為海為

此海ノ幅負廣狹魯西亜國人之說ニ其長十天氣
好クノ水面静ナル時舟行凡十五日程廣サ八
日程ナリトコル子リ又、テ、ゴロイント云ヘル
人ノ百ニ見西亜國紀行ノ書ノ第十七篇ニモ亦
如此ニ記ス即其東西ノ廣サトシ南北ノ長サ
トス又相傳フ此海上亞私大麻甘ノ地ヨリノ

ヘルバツトノ地ニ至ルニテハ其廣サセル馬
泥亜國ノ里法ニテ凡ツ百里アリ又其東方カ
ラカンノ地ヨリノ西ノ方シルカシインン韃靼
ノ一部ニノ今ハ魯西亜ニ属ス又キル口ニ見
ノ西亜等ノ地ニ至ルノ間ハ凡九十里アリト而
ノオレアリウスト云人ノヨク精密ニセリ此
海ノ圖モ亦南北長クノ東西ハ狹ク舊時ノ圖
ノ東西長キモノト異ニシテ則近時ベテリテ
ン、ゴロイン帝命ノ確實ニ作ラシムル所ノ
八

此海ノ新圖ト相同シ又「シユリウス、カサニ、又
スカアリケルト云人モオレアリウス」ニ先ダ
チテ既ニ此海ノ南北ニ長キ「シユリウス」ニ
セツ「ラリウス」ト云人ノ所著ノ輿地志第三卷
ノ第十八章四百八十號ニ亦此海ノ事ヲ論メ
曰ク「ヘロトキユスト云人ハ誤テ此海東西長
シトスコレ「バトロノウス」ノ圖ニ依ル者ナリ
ト「アラブ」國地志ヲ撰述シ「タリテ」モ「ナ
レ」氏世ニコレヲ用ヒズ惟「ホツシ」ウスト云人

ハコレヲ倍用シテ其所著ノ書ノ篇三卷ノ第
五章二百四十號ニ所說亦東西長ク「ナ」又カ
リケル及「オレ」アリウスニ「子」ノ說ニ相反セリ
ト云「按」ニ「書」ニ「イ」テ「ル」ケ「ル」カ「ト
國政及今魯西モ北地方等詳ニ「大」ニ「最」古
加亞細ヤ如キ其地形今圖ニ「大」ニ「最」古
ノ緯度教モ亦大ニ「方」ニ「理」ル「故」
十ノ未「天」下萬國去「東」而「南」北
諸國モ北「高」海ニ「今」一「形」テ「諸」國
長キ「北」ア「高」海ニ「今」一「形」テ「諸」國
視「東」西「狭」ク「ナ」リ「其」形「諸」國「皆」一「時」
九如「シ」ハ「コ」ロ「南」北「長」

ル、水ノ浅深ヲ測テ新圖ヲ製セシメテ其地ノ度
分レル

此海固ヨリ大海ニ通セズ故窮理學家多クコレ

ヲ疑フ所論ニ数説アリ惟此海ニ入ルノ河水

ハ即極テ夥シ其諸河ノ中最モ名アル者ハ高

加^ラア^ラス^キシ^ロセ^イン^ビユ^スト^ロウ^ア

リ^サイ^コイ^シユ^ヤイ^クス^エム^スニ^オス^オキ

シ^ユス^オル^キサ^ンテ^ス等^ニノ^其オ^ルキ^サン

テ^ス河^ハキ^ユル^シウ^スト^云人^ノ書^ニハ^ク十

イスト名ケリ同名別河ナリ其説下ニ見ト

此海ノ事上ニ云ブトク数説アリ而ノ^ナアリニウ

ス^名ノ^説ニ^ハコ^レ北^海ノ^一分^ニシ^テ即^海湾

ナルベシ此海散テ大海ニ通セズト雖モ其水

ハ鹹ニメ海水ニ異ナルヲナシコレニ因テ考

フレバ蓋シ此海ノ底ニハ即チ孔道アリテ大

海ニ通スルノ理疑ハ容ルベカラズト云ヘリ

凡^レ此^海向^ノ中^央ハ^極ノ^テ深^シ人^コレ^ヲ測^ルニ

深^サ七^十托^本一^托七^尺ニ^シテ^尚未^ダ其^底ニ^至

ラス又此潮ニ盈退潮長ナクメ而ノ時トノ水
自ラ流レテ一適リナシテ西方海岸ノ上ニ溢
ル、トアリコノ流溢スルモ亦猛風海ヨリ来
テ其水ヲ激メ岸ニ溢レシムルノミモ非ス其
天氣静和ノ時ト雖モ亦コレアリテ水恒ニ高
シ或ハ云此海四面岸ニ近クノ河流ノ注ギ入
ル処ノ辺ハ其水味甘ク河口ヲ去ルノ稍遠キ
処ノ海岸ハ其水味鹹ニ海ノ中央ハ則都テ鹽
ニナ水色深緑ナリトケムヘルト云人著ス所

ノアムニ夕テ又、エキソケト云ル書ノ第ニ
百五十八号及二百五十九号ニコレヲ論シテ
曰ク此海岸一帶ハ其水都テ甘クメ如此ノ深
綠色鹹味アルトナシ何ントナレハ岸ニ近及
キ処ハ底ニ至ルニテ其水甘ク濁リ時トノ泥
濁ナルトアリコレ此海ノ四面ヨリ多ノ河水
其中ニ注ク河水ハ其性輕クシテ且淡ナリ海
ニ入レモ海水ト相混スルト無クメ岸辺ニ廣
カシ且ツ静ナル天氣リ時モ海水ハ性重クメ
十一

濃ナルカ故ニコレニ阻テラレテ海ノ中央ニ
至ル丁能ハサレハ自ラ海辺ノ沙地等ノ上ニ
高溢レ廣カルナリ故ニ此海ノ四面スベテ岸
ヲ去ル丁二里餘ノ間ハ其水皆淡ニメ甘シト
云コレ^レケムヘ^レ親シク試見テ明カセルノ説
ナリ而ノ此諸大河ノ水皆勢ニ乘シテ激流レ
テ海ニ注ギ又海水ニ阻テラレテ相容レホル
ヲ以テ其岸辺ノ地ヤ、モスレバ水ノ沸騰ニ
因テ其患ヲ被ハル丁モアリ^ツエチ^エイン^ト云

凡島^此海中^西辺^地ニ^近シヨリメ一里ノ間ハ
風アル時ハ波浪最烈シクシテ船行ス凡者夜
ニ入テモ此処ニ碇ヲ下シガタレコレ此島ノ
西ニアタレル大地ヨリ河水恒ニ此ニ注キ其
流勢猛ニ且河水海水ト相容レズメ波浪ヲ急
起シ又河水ニ粘滑ナル性アルモノ水底ニア
リテ波ノ沸騰スル勢ニ乗メ碇ヲ滑ラカシ走
ラシム故ニ此辺ハ船ヲ泊ムルニ危嶮ナル丁
アリ然レモ其河ヨリ注ク所ノ水ハ皆味甘ク

ノ淡ナリ故ニ船行多ク此水ヲ汲テ以テ飲食
ノ用ニ供ス又此海ノ中央ハ水鹹ニシ其色深
緑ナリ其中ハスロオト^{海底}深淺ヲ用テ測
レトモ其底ヲ知ラサル如キ最深キ処ニテハ
其水中ニ於テ色黒クハ恰モ溶化セル番^{瀝青}
ニ似タル者ヲ見ル^{トアリ}ベト^{ユス}ト云人
所撰ノ史書ノ第一百二十号ニ此ノ黒キ者ノ
事ヲ詳明ニセリ然レ^氏オレアリウ^スニ^人見^上
ノ説ハコレニ反シテ曰ク此海中ニ此ノ如キ

者ナシト又ケム^人見^上ノ如キハ既ニコレ
ヲ試ミテ上ノ二説ノ差異アル所以ヲ明カシ
タリ此黒キ者ハ此海上ニ於テ時ト^ノ見ル所
ノ者ニメ草々ニハ見得ル^ト稀ナリ^{オレ}アリ
ウス^カ如キハ當時此海ヲ渡ルト^至モ草々ニ
ノ彼黒キ物ヲ見ホル^トベト^{ユス}及^ビケ
ム^ヘルハ共ニ詳ニ試ミ見タルナリケム^ヘル
所記ニ曰ク此黒キ物ハ其自然所有ノ色ニハ
非スタバ人目ニ^シ黒キト見ユルナリコレ

ヲ汲テ硝子器ニ納レテコレヲミレハ都テ透明
 ニシ他ノ水ニ異ナルヲナシ其味ハ鹹ナラズ
 ノ極メテ苦キヲ恰モ膽汁或ハ茵陳ノ如ク苦味
 ニシ舌ニ着テ遠ニ脱セズ又濃キ油氣ヲ帶テ
 其香モ亦甚佳ナラズ蓋コレカウカシユス山中
 所トメ地底ニ火アリテ又孔道アリテ此海底
 ニ通シ若猛烈ノ風ニ遇テ海水沸騰スレハ即
 海底ノ水彼孔通ニ激入シテ火氣ニ遇テ熱沸
 シテ遂ニ黑色苦味油氣アリテアシキ香ヲ十
 スモノナルノミカウカシユス山ノ如キハ琉
 黄ノ氣多ク伏藏シテ其山時々烟火ヲ出タシ
 テ焚ケルヲ多シ其山脚ノシ井ルウラ一
 名スキルハンノ地ノ西見西亜國別名ヲ西見
 西亜國ノ人呼テアシユウルメイシヤアト
 ヌフコレ火地ト云ル義ナリ則コレ彼山中伏
 藏スル所ノ火氣此海底ニ通スルヲ理亦疑フ
 ベカラズト云詳ニケムハ此所著ノアムニ夕
 テスエキソナケノ書ニ見ユ

ヘテルテシ、ゴロツテシ帝此海ニ於テ多ク船ヲ
造ラシムコレ元来西亜靉靺鞨等西亜モオ
レシ里人等ノ人此海ヲ渡ルニ專夏月ヲ用ユ
其他ノ時候ニ渡ルニハ殊ニ小舟ヲ以テ長ク
海岸ニ沿テ渡ルヲナシテ敢テ海ノ中央ヲ
渡ルコトナシコレ其舟小ナルヲ以テ風ヲ怕レ
防キ且此海ノ中央ハ風色屢変シ且岩石多ク
ノ舟行風ニ因テコレニ觸レテ怖レ岸ニ岸
ニノミ沿テ小舟ノ行ル故ニ行程遅ク且安

穩ナリトセズ多クノ貨物ヲ運フトハ最難骨
ナリトス帝コレヲ憐ニ因テ國人ヲ火船ヲ
造ラシムテ多クノ貨ヲ積ニ便リシ海岸ノ固
阜ノ上ニ堤ヲ築テ準望トシ又航海ノ術ヲ教
ヘテ習熟セシムコレヨリノ海ノ中央ヲ渡ル
ニモ亦風ヲ患ヒズ往來運送皆其便ヲ得テ萬
事自由ナルヲ實ニ此帝ノ恩惠ニ頼ルナリ此
時一ノ甚佳キ港見出セリコレ東ハ靉靺鞨ノ地
ノ隅ニ對ス名ヲ「キユアレシ」又「ミンキシカ
十五

ラクトモ云フ

ホハホニウスノラト云人ノ所記ニ曰ク此海中
ニハ多クノ蛇及ヒ其他種ノ異形ナル海族ノ
類多クノ日ニ人ノ害ヲナスト云リ然レト
モ此海辺ヲ旅行シタル人及ヒ海辺ノ居人ニ
訪フニ全ク此事ナシ唯諸種ノ美味ナル魚ト
極テ毅シ就中鰻魚最美ナリステウル^ル及
^ルカ^ルパ^ル^ル輕^ルハ共ニ其長廿ニエ^ルレ^ルニ^ルエ
ニ^ルハ^ル本^ル邦^ルニ^ル分^ル尺^ル有餘ナルモノ多ク又^ルバラ^ルア

セム^ル曲^ル鬚^ル魚^ル及ヒ鰻魚ノ大ナル者花ニ其他美
味ナル諸魚甚多シ然レ此海ノ諸魚皆肥大ニ
シ脂膏多ク觀美ニシ味亦美ナリト雖^レ氏^レ然^レ
氏人ニ利ナラハ^ルト多シト云是ヲ以テ魯而
重ノ官府ヨリ懇ニ養生ノ告誡ヲ此海辺ノ成
卒及居人ニ示シ諭シテ其病ヲ生セン^ルト^ル防
カシム此海中鰻魚梭魚ノ二種ハコレヲ見ズ
其他ノ諸魚ハ漁者夥シクコレヲ捕獲シテ殊
ニ多ク^ル百^ル見^ル而^ル亞^ル國^ルニ輸スコレニ因テ毎歲所

得ノ魚價ノ利勝ヲ計フベカラズト云蓋此魚
ヲ輸送スルノ必ハモスコウヨリノ北高海辺
ヲスキコレヨリノ百見西亜ニ至ルノ間ノ韃
韃諸部ノ地ハ道路險阻ニノ荒漠ノ地千百里
ニ連直シ其地食ニ乏ク人亦養生等ノ事ヲ解
セズ行旅往來スル者皆乾魚及ヒ馬肉ヲ以テ
糧ニ充ツ故ニ此諸魚ヲ鬻クハ夕バ百見西
亞國ノミナラズ韃韃諸部ノ地及ヒ其行旅ノ
用ニ供スルガ為ニ貿易スルモ亦極テ多キナ
リ

凡北高海ノ辺都テ上古以來ノ古跡旧趾多シ故
ニ好古ノ學家毎ニ多クコレヲ搜索シテ從來
未タ識ラガルノ珍奇ノ事實若クハ古物ヲ得
テ史傳ニ所載ヲ證メ聞見ヲ廣ムルヲ多シ殊
ニノテ今ノ百見西亞國中ノ大國ニ
シノ地ノ辺ハ昔時ハ口オテアレキヤ
ナリ古ノ御宇ニ祭テ多シ日
テハ古ノ御宇ニ祭テ多シ日
テハ古ノ御宇ニ祭テ多シ日
南ハ西亞弗利加ノ既入多利未西十
南ハ西亞弗利加ノ既入多利未西十

威名天下古今英雄主り、
義二ノ西洋古今英雄主り、
テコレノ尊類ナリ、
口オレノ帝ノ尊類ナリ、
ルニ始ルノ尊類ナリ、
セリト大戦ナリ、
増等ノ遺址猶存スル者多シ、
ノ説ニゴロオレアレキサンテル喜ル甘人、
二國名今等ノ百見西ノ高海ニ儂ヘリ、
於テ木ヲ伐テ船ヲ造ラシメテ北高海ヲ渡リ、
シトアリト其事蹟ヲ記セル者今詳ナラス、
或

ハ曰クアレキサンテル此海ヲ渡テモスコフ、
ノ地ニ至レリト然レ今此辺諸処ノ地多ク土、
ヲ掘テ象牙ヲ得ルトアリコレ則アレキサン、
テ此ノ時ノ死シタル象牙ノ牙ナリト疑ナシ何、
トナレハアレキサンテルノ如キノ盛ナルニ、
亦サヤバ如何ゾヨク如此ナル多クノ象牙北、
等ノ地ニ携フル者アラシヤ、
見レ西ノ諸國ノ地ニ大軍ヲ起シテ東ノ國、
ヲ征ス度ノ地ニ大軍ヲ起シテ東ノ國、
テコレ大ニ戦コシテ其象ヲ得、
十

諸國ヲ捕破^ニ逐^ニ進^テ印度諸國今^ノ麻^辣好^爾
河^至金^宝珠^玉地^ヲ萬^平其^間所^得見^ノ象^家
馬^諸畜^金宝^珠玉^地萬^平其^間所^得見^ノ象^家
如^キ樓^ハ絶^テ高^キ地^ヲ及^ヒテ^モ故^ニコ^ウ等^ノ西^史見^ル則^チ
コ^レア^レキ^ガン^テル^ノ北^高海^ヲ渡^レル^ノ
真^{ナル}得^テ證^スベ^シ又^ペテ^ルテ^ハゴ^ロオ
テ^帝此^海邊^ノ地^ヲ巡^狩セ^シ時^ニ此^邊ニ^於テ
教^父ノ^極テ^旧キ^城地^ノ荒^廢破^殘シ^テ其^遺跡^ヲ
ノ^尚存^スル^者ヲ^見ル^コレ^皆蓋^シ上^古ノ^時ノ
城^地ニ^シテ^其古^ノ時^ニ稱^セレ^所ノ^城地^ノ名^ノ

如^キモ^皆文^献得^テ徹^スベ^カラ^ズノ^コレ^ヲ知^ル
ル^者十^シ唯^好古^窮理^ノ学^家其^遺跡^ヲ檢^ノ其^其
造^築ノ^規制^定テ^上世^ノ時^ノ物^ヲル^ノヲ^識ル^ル
ノ^ミ又^此邊^ニ於^テ多^クノ^版碑^ノ類^ヲ得^タリ
其^上ニ^記ス^所ノ^文字^亦皆^人ノ^コレ^ヲ識^ル者
十^シペ^テル^ルテ^ハゴ^ロヲ^テ帝^ノ書^庫ヲ^主ト^ル
ノ^貴官^スギ^ユセ^ルト^云人^其内^ノ一^版ヲ^携
ヘ^テ入^ル馬^泥亞^國ニ^至リ^テ諸^ノ博^古ノ^士
示^ノ其^コレ^ヲ識^ル者^アラ^ント^シ希^ヒシ^ニ唯^ニ

ベルレイン^{ベル}入^{レイ}馬^ン泥^ハ帝^グノ^ノ輔^ニ政^ニ九^ノ國^ノ一^ノ
漏^ル生^レ王^位ヲ^兼ル^ルノ^ノ書^庫ヲ^主ル^ルノ^ノ貴^官ヲ^ラコ
口^オセ^ト云^人名^答ノ^博学^ノ士^ニモ^此文^字ヲ^識
識^テ詳^ニ其^文義^ヲ解^辨セ^リト^云フ^其解^辨ノ
説^長シ^故ニ^此ニ^畧ス

此海ノ周リハ皆高山險峻ニシテ
レヲ圍ム諸地理ノ書ニ亞^{アル}黙^ニ尼亞^ノ國^{ヨリ}ノ
北^高海^ニ至^ルテ^北ヨリ^起テ^南ニ^迄レ
ノ^諸山^コレ^ヲ總^稱シ^テカ^スピ^セベル^グト^云

ヘリカス^カス^スピ^エト^ハ古^ノ國^名ニ^シテ^此海^ノ西^ニ即^チ
ル^セ海^ト云^ベル^グハ^山也^即カ^スピ^セト^云フ^人所^謂云
石^ナカ^スピ^セト^云フ^カス^ト稱^スル^モノ^アリ^ト標
ス^ト云^ハ門^ト云^義ナ^リカ^コレ^一ノ^狹ク^シテ^險阻^ナ
ル^道路^ニシ^テ此^海ヨリ^ノテ^ルベ^ント^云フ^地ニ^至
ル^テテ^ノ山^間ナ^リ左^右皆^岩石^屹立^ス此^峽路
ノ^長ナ^ク八^千シ^ケレ^エテ^シケ^レハ^本朝^ハ申^尺五^尺
ト^云ハ^云ク^コレ^岩石^ヲ鑿^開シ^テ此^路ヲ^通
セル^者ナ^リト^其幅^僅ニ^車ヲ^通ス^ベシ^此峽^路

廿

ヲ近時ノ地志或ハ称メテフリス、

フリスハ日アル日亜國ノ内ノ一府ノ名ナリ

ハ即チ明人ノ地ノ所謂別名ノ

鉄都也、

諸國ハ人々其ノ堅固ヲ云フ也、

ト云、人所撰ナリ書ニ見ユ、

今ノト云、北ノ高地ニ近キ

スベシニ並ニ北ノ高地ニ近キ

テ、
元ルケハ、
地ハ羅甸、
古ノ國名ニ其意、
語今傳ハ

テ、政、
雅、
羅、
巴、
洲、
中、
語、
ニ、
テ、
ハ、
テ、
ル、
キ、
シ、
テ、
ハ、
ト、
云、
ハ、
細

近シ、
コ、
レ、
魯、
西、
亜、
ヨ、
リ、
百、
兒、
西、
亜、
ノ、
隅、
ノ、
界、
ノ、
國

ル、
ノ、
城、
地、
ト、
ス、
千、
七、
百、
餘、
年、
ノ、
比、
ヨ、
リ、
ノ、
魯、
西

亜、
ノ、
帝、
命、
ノ、
土、
ヲ、
以、
テ、
封、
疆、
ヲ、
増、
築、
キ、
要害、
最、
堅

固、
ニ、
魯、
西、
亜、
ノ、
精、
兵、
二、
千、
人、
ヲ、
置、
ク、
此、
府、
初、
ノ、
魯

西、
亜、
ニ、
属、
シ、
テ、
ヨ、
リ、
魯、
西、
亜、
本、
國、
ノ、
規、
制、
ニ、
依、
テ

城、
ヲ、
築、
キ、
其、
後、
千、
六、
百、
三、
十、
六、
年、

日、
本、
寛、
永、
十、
三、
年、

和、
蘭、
ノ、
人、
コ、
ル、
子、
リ、
ス、
カ、
ラ、
ア、
ス、
千、
六、
百、
七、
十

廿一

早

年尙餘覽故年ニ思可奔^レ亞ノ人「バイレイ」ナ
ル者共ニ此城是ヲ修造シテ一ノ大ナル陣營
ヲ城前ニ建テ又深クノ廣キ涅ヲ鑿テ府外ヲ
環ラシ今ハ魯西亞國中ノ善キ城地ノ部ニ入
レリ

此府ハ北極出地四十二度半ニアタリ亞私大^レ脈
甘^レ地ヲ去ル^レ魯西亞ノ里法ニテ凡七百里
入^レ爾馬泥亞ノ里法ニテ凡九^レ七百里本
ハ二十里北高海ヲ去ル^レ半里^レ亞^レコ^レ里^レ入^レ爾馬泥^レチ

メ^レキ^レト云ル曲流スル小河ニ傍ヘリ其海辺
ノ地ハ都テ沼澤多クシテ蘆葦ヲ生ス此府ノ
周匝ハ地都テ平坦ニナ山陵ノ類ヲ見ズ而テ
地志地圖等ニ或ハ曰ク「ケイ」ハ「シルカ」
イン^レノ内ニ在テ其地山ニ傍ヘリト云コレハ
誤テ「タケ」ス「タシ」ニ北高海ニ近キ韃靼ノ一國
ノ内ナル「タルキ」ノ地ト混シタルナリ「タル
キ」ハ北極出地四十三度二十三分ニアタリ
テ「ケイ」トハ別地ナリ

テルケイノ地其名義原始及ヒ其始テ此府ヲ造
建セル者等ノ事今皆詳ナラズ蓋シ其始ノハ
韃靼ノ人所築ノ府ニシテ其時世モ亦得テ考
ベカラズ今ニ至テ城内ニ尚古一所建ノ木ヲ
以テ築ケル臺及ヒ塙ノ存セルアリテ其制庶
朴ナリ此府外ハモスコクヨリメ而兎西亞國
ニ往來スルノ路ナリ然レ氏其地都テ不毛下
濕ニノ沼澤アリ蘆葦及ヒ野樹多ク又多ク野
氣及ヒ斑文アリ蛇アリ此蛇ノ圍ニ人臂ノ如

シ毎ニ野ニ出テ毒蛇レテ日光ヲ受クルトシ
好ム

テルケイノ府内ニハ魯西亞ノ人多ク居住シ又
而兎西亞ノ人モ此ニ來テ居リ占ルアリ其
ルカシインノ人ハ府外處ニノ郡邑ニ居リ又
多クハ林樹ノ中ニ居リ構ヘテ隣境ノ韃子ノ
盜ヲナス者ニ備フ

凡シルカシイン國ノ地ハ亜細亞歐羅巴二洲ノ
間ニアリテ大半魯西亞ノ帝ノ州郡トナレリ

其境界南ハ大海及ヒカウカシユス山ニ抵リ北
ハ大乃河ヲ以テ日阿爾日亞オヨビ小韃靼ト
界ヲ分チ東ハ北高海オヨビ高ル加河口ニ至
リ西ハ墨何的湖オヨビ加去ノ海峡ニ臨ナリ
シルカシイニ國中亦多クノ小君長其地ヲ有ツ
モノアリト推モ皆魯西亞ノ帝ニ臣服シテ恒
ニ貢物ヲ進メ政刑詞訟等ノ重事亦一二テル
ケイニ所居ノ魯西亞ノ酋長ノ知分ヲ聽ク其
人物形象宜キニ適ヒ男子ハ幹氣強壯ニ婦人

ハ其髮漆黒ナリ男子ハ長衣ヲ著テ上ニ外套
ヲ加ヘ肩ノ処ニテコレヲ結ビ頭ニ韃中ノ戴
ク婦人ハ綿布ヲ襯衣トシ長キ丁臍ニ至リ脗
ニ至ルノ処ニテコレヲ結ヒ上ニ衣ヲ加ヘ牛
ノ膀胱ヲ取りコレヲ膨ラシテ頭上ニ戴キ布
ヲ以テ其上ヲ揉ク爪爪親睦ニノ事アルニ遇
ヘハ能ク相聚リテ他邦ノ敵ヲ防ク今ハ魯西
亞ノ化ニ服メ能ク魯西亞ノ言語ニ通シ文字
ヲ識ル其人都テ甚驕馬ヲ善ク又他邦ニ交易

スル物件ハ、スラアヘシ人ヲ嚮テ奴者或ハ窟
坑及ヒ鹿皮、牛皮、羊皮、ステエン、ボク類、皮
等最多シ亦錢貨ヲ用ルトヲ知ラス唯一ニ物
ヲ以テ相換ルノ今スデニ魯西亞ニ属ノ國
中都テ厄勒奈ニ教法ヲ崇信ス惟小兒ノ如
キ八歳ニ至テ始テ灌身ノ礼ヲ行ナフト云
此地昔時ハ寺觀オヨク僧徒ノ類アルトナシ然
レ氏定ニレル時節アリテ其期ニ至レバ礼式
ヲ以テ神ヲ祭祀ス人死レテ其葬礼ノ如キハ

死者、眷属男女彩シク其葬埋スル外郊ノ野羊
會集シテ牡野羊ヲ以テ其靈ニ供ス則先野羊
ノ陰茎ヲ截リテコレヲ葬処ノ樹籬ニ向テ擲
ツ若其陰茎樹籬ニ掛リ留レハ則テ靈ノコ
レヲ享ケタルナリト云若掛リ留ラズノ地ニ
落ツレハ則又他ノ野羊ノ陰茎ヲ截テ再ヒコ
レヲ擲ツ而後ニ其野羊ヲ屠リ其皮ヲ剥テコ
レヲ擴ケ長枚ニ穿テ懸テ以テ靈前ニ供シ其
肉ヲハ或ハ煮或ハ炙リテ相聚リテコレヲ食

に即ち其懸タル皮ノ前ニ進ミテ皆共ニ靈ヲ
拜シ拜礼畢レハ婦人ハ皆退テ家ニ歸リ男子
ハ尚留リテ靈前ヲ退キテ共ニ燒酒ヲ飲ミ醉
ニ至ルヲ度トシテ則チ家ニ歸ル葬埋ノ礼ハ
コレヲ了リトス其懸タル皮ノ如キハ尚コレ
ヲ留メテ再ニ此処ニ至テ拜礼ヲナスノ期ニ
至ルニテハコレヲ存ス其後其葬埋セル土上
ニ於テ板ヲ以テ家ヲ建テ彩画塗飾メ或ハ其
所居ノ家ヨリモ華美ナルアリ又木板ヲ偏ニ

レエムル陶器ヲ造リ以テコレニ塗リテ壁トナ
ス其葬ノ挽歌極テ悲恠ニハ喪ニ居ルノ礼亦
慘ナリ自ラ其仇ヲ以テ臂及面上ヲ搔抓シテ
深キ創ヲナシ喪ヲ終ノ頃ニ至テ始メテ愈ユ
或ハ其喪ニ居ルノ間ニ半ハ愈ントスルノ創
ヲ再ニ拓開キテ以テ喪ヲ畢ルニ至ル者アリ
ト云

レカシイシノ地上ニ云コトヲ都テ魯西並ニ
屬スト余比今コレヲ詳ニスルニ其内ノ迦都

ニニ処ノ小地都児格ニ属セルアリ一ツ「タニ」
ト云ヒニツ「タニ」ニキト云皆硯角ノ地ニ
メ「アソ」ノ道路ノ末大乃河ノ流レノ辺ニア
リ

上ニ云ル「~~鉄門~~」ノ府ハ即チ亞細亞洲外

ケスタシ「~~鉄門~~」ノ内ニメ北高海ヨリ百見西亜國
ニ至ルノ間ニアリテ即チ百見西亜ノ界ナリ
コレ南方百見西亜オヨビ他ノ亞細亞諸國ヨ
リメ「モスコ」及ヒ他ノ北方歐羅巴諸國ニ通

スル往來咽喉ノ要路ナリ其地「カウカシ」ス
山ト北高海トノ間ニメ「タルベ」トハ即チ門
ト云ヘル多ナリコレ其道路長クメ狭ク両辺
皆絶壁屹立シテ恰モ左右ニ高牆アルカ加ク
直ニ其府ノ地ニ至ル其城ハ高キ山上ニ造建
シ藩亦即其府内ニメ繞ラヌニ郭ヲ以テメ要
害ヲ蔽ニス此府下北高海岸ニ一ノ海港アリ
其廣ハ凡三百「シケ」ユズニハ一日本ノ由尺五
「尺」ニアリト云フ

上古ノ世ノ此地ノ土人ノ事ハ既ニ「スタラボ」リニエス「パリニウス」等諸子ノ輿地志載録ノ此地名ヲ「タルビ」セス又「タルビ」ア子ト云ヘリ

今土人ノ説云此城ハコレ「ゴロオ」夫アレキヤン元ル「古リ」上「勸奈」記ノ帝ノ時ニ造建セル者ナリト而シ其内ノ一門甚高シコレ高大ナル石ヲ方形ニシテ以テ堅固ニコレヲ築キ又一ノ長尖ナル石上ニ西「イリ」牙國ノ文字ヲ三行ニ彫刻

ニ其他多クノ石上ニ種々ノ奇異ナル文字符号等ヲ彫刻セル者皆今存ス而シテ城ノ牆上ニハ多クノ海中ニ所産ノ貝殻墨トトナ附生セリ

此府其形狭長ニシテ海ヲ離レテ山士登ルニ下ノ間凡半里一日歩餘其幅ハ凡四百五十「シケ」工テ「本」一「曲」尺五「尺」五寸ハ日コレ百見西「亞」ト「魯」西「亞」ト分界ノ所ニシテ廿ニコレヲ百見西「亞」ノ鎖鑰ト称ス魯西「亞」ヨリ陸地ヲ歴ニ百見西

此府内分テ三部トス其一ハ山上ノ地ニ即チ
城アルノ処ナリ鎮守ノ官コレヲ守テ部下ノ
軍卒五百人多ク大砲ヲ列子テ兵備嚴重ナリ
其他魯西並ノ人多ク居住ス其二ハ即其中央
処ニノ空地多シ百鬼西並ノ人多ク居住ス其
三ハカヘルユナシ又キリイケン、ス夕ツト
厄勒奈並義部ト云コレ古ハ厄勒奈並ノ人多
ク居住セルノ処ナリ故ニ如此ニ名ク然レ氏

此処ハ今ハ人家少ナシテルベシトノ府外殊
ニ海岸ノ如キハ岩石甚多シ故ニ港ニ入ルノ
舟船頗艱ニ滑スルヲアリト云
此府ノ三ノ郭其第一 所見西並人 第三 古ハ厄勒
ノ郭、二郭ノ牆ハ最厚シ其幅ハ人車馬ニ駕
シテ牆上ヲ行ヘシ其山上ニアル処ノ即第一
ノ城郭ノ牆モ亦厚廿三尺餘アリト云此府ヨ
リシテ大海ニ至ルノ間ハ其行程凡ソ五十餘
里餘里ナリ百アリ其間古時ノ遺跡頗多シ然レ

氏多クハ壊破セル跡ノミニシテ觀ルニ足ル
者ナシ行路往來惟此「カ」ルベシト、長墻狹路
ヲ奇トスルノミ此府外知カノ國阜、上ニ多
ク候望ノ処ヲ建テ遠方ヨリ此府ニ至ル者ヲ
檢査ス

此府内ニ又都兒格及ヒヨオテシ五古ノ人如徳
諸國ノ中ニ分散シテ皆其祖先ヲ教テ守テ散テ
ノ人亦多ク居住ス其ヨオテシノ人ハ皆自ラ
稱メ「ベ」ヤシシス古ノ苗裔ナリト云フ又

韃靼ノ諸部各互ニ其他部ノ小兒ヲ掠奪シテ
此地ニ鬻キシ者亦成長メ多ク居住シ其人ハ
多ハ工業ヲ勉メテ商賈ヲナス者稀ナリ

凡此地上古ノ時造築セシ屋室樓臺ノ類ノ遺趾
及ヒ其他古蹟多シ然レモ今コレヲ尋訪スル
ニ的實ナル原始由來等ノ真説ハナク土人ノ
所談ハ皆荒唐言誓ノ説ニナ信スルニ足ル者
ナシコレ此地ニ昔ヨリ才學知識アル人ノヨ
ク故事ヲ搜尋記載セル者絶テ無キニ因テナ
三十

リ今土人ノ所談ノ鏡一條ヲ奉ク此府ノ側ノ
垣牆ニ近クマ、ワムニユト云人ノ墓アリ都呪
格才ヨ正百呪西垂ノ人ハ天神ヲ称メ、エ、
ト云昔シ人アリ一日此地ヲ過キテ一ノ弱體
地上ニアルヲ見ル此人思ヘラク此弱體憐ム
ヘシ亦コレ昔ハ人ナリ惟何人ナルヤコレヲ
知ラレトシ歎スコレ天神ノカニ非ズンバ此
弱體豈再ニ生テ其生時ノ事ヲ語ルヲアラン
ヤト此ニ於テ一心コレヲ「エ、」ニ訴ヘ拜ス
時ニ弱體忽チ生キテ人形ヲ見ハス此人則其
生前如何ノ人タルヲ問フニ彼答テ曰ク我名
ハ「ツム」ニユ子ト号ス古ヘノ世ニ此辺ノ地ヲ
治メタルノ国王ニシテ其隆盛富樂ナルト比ス
ヘキ者ナシ毎日我カ庖厨ニ供スル知ノ鹽四
十萬斤ヲ費ス庖人四萬人コレヲ用テ百味ノ
飲食ヲ調理シテ我ニ薦メ樂徒四萬人恒ニ我
側ニ在テ音楽歌舞シテ我カ樂ニ供セリト此
人即其「エ、」ニ祈テ彼ヲ再ニ生シムノ事

シ告ク彼曰ク我ハ即コレ「エイツシ」化身ニ
ノ天下ノ人ノ苦ヲ救フノ教法アリテ神通等
迎ニ故ニ生前ノ如キ其富樂亦比テ今我
シ活カストイヘ此我今ハ昔時ノ生前ト異ニ
ノ尺寸ノ地ナレ因テ汝ニ授ケルノ福ナレ如
カシ汝「エイツシ」ニ祈テ再ヒ我シテ死ナレ
メ可我ハ冥中ニ在テ汝ヲヨビ天下ノ人ヲ救
ヒ保護セシトテ欲スト此人即チ又「エイツシ」ニ
祈ルニ彼又忽ニ死ス因テ此ニ葬ト云其説ハ

荒誕不經ナルト此人如シツレ四十萬斤ノ鹽
四萬ノ庖人四萬ノ樂徒等ノ如キ誇大ノ甚シ
キ者世豈此理ヲランヤコレ人宜シク知ルベ
シ彼ノ馬哈點ノ教後ノ誇大ノ虛誕寓言ノ如
キハ平常ノ事ニシテ怪ムニ足ラズ彼教ノ祖師
馬哈點^{フホノツト}ヲ以テ大聖トシテ其所傳ノ事蹟ノ誇大
妄誕ナルヲ以テ知ル心シ馬哈點ノ教トハ漢ニ
ノ人^ノ所^ノ奉^ノ格^ノ百^ノ見^ノ西^ノ亞^ノ此^ノ他^ノ此^ノ府^ノノ^ノ側^ノニ^ノ於^ノテ
地ヨリ掘出シタル一二千ノ墓碑ノ類アリ其

制皆上頂ヲ圓ニナ
其申或ハ極テ巨大ナルモ
アリ多クハ西利牙^{ヤイリア}國及ヒ亞刺比^{アウラヒ}亞國ノ經文
ヲ記シ彫リタリ其古事由来等ハ土人ノ説ク
所皆不經ニシテ尖^ツフベキト上ニ攀クル所ノエ
イッ^ツシ^ツム^ムシ^シ子^子ノ類ニシテ一モ取ルニ足ラズ

此府城ハ上ニ云ヘル如ク甚高キ処ノ岩右崔嵬
タル上ニアリ故ニ多クハ湧泉流出シテ下リ
流レテ北高海ニ入ル水陸旅行ノ人共ニ其水
ノ清潔ナルヲ以テ土人ニ水價ヲ與ヘテ此泉

水ヲ買ヒ求ム此府ハ原コレ百見西亞國ノ有
タリシガカンタハル^ル其地百見西亞ノ東北ニ
ナリノ酋長^シミリウ^ウイス^スナル者百見西亞ノ王ニ
致キテ鬪争久シク止マズメ其國乱レタルニ
因テ十七百二十二年^{日本享保十七年}原^原照^照六^六十^十一^一年^年清^清ヲ^ヲ申^申
テ遂ニ魯西^{魯西}垂^垂ノ地トナレリ

カウカシ^{カウカシ}ユ^ユス^ス山^山ハ北高海ノ辺ヨリノ諸方ニ亘ル
ノ大山ニメ敢テ北高海ニ属スルト称スベキ者
ニハ非ズト雅氏^{雅氏}後學ニ便セシガ為ニ左ニコレ

ヲ記ス

抑モ、カウカシエスハ、亞細亞洲中最大ナル山ニシテ
一名「タウリユスト」云此山ニ因テ亞細亞總州ノ
地ヲ分テニトナスコレ此總州ノ一辺ノ末界
ヨリノ廣ク大洲ノ内ニ連直ノ直ニ被一辺ノ
末界ノ地ニ至レバナリ而シテ此山ノ長ク連直
ニ續セル内ニ於テ最高峻ニテ大ナル処其内
ニ凡三処アリ本名其一「タウリユスト」ト云ヒ
ニシテ意旨ト云ヒ三「カウカシエス」ト云フ其カ

ウカシエスハ則チ歐羅巴洲ノ界ニ隣リテ則チ
莫斯科末丘都兒格太海北高海ノ間ニアルノ
山ヲイフ古來輿地ノ記載セル諸家ノ内「パリ
ニウス」及「キユルシウス」ハ上ニ云フ三名ヲ混シ
テ此總名ヲ「カウカシエス」山ト稱シテ印度ノ地
ニ所在ノ大山ヲモ皆「カウカシエス」ト記セリ而
シテ「スタラボ」カ撰スル所ノ輿地志第十一卷此
山ノ條ニコレヲ辨シテ曰ク地理家々、其古
ヨリ本名アル三大山ノ名ヲ混シテ皆「カウカ

シユスト稱スルノ敢テ粗略ニメコレヲ詳審ニ
セザルニハ非スコレ昔時ゴロオテアレキカ
ニテル厄勒上ニ見帝東方諸國ヲ蕩平セシ時
ニ其所從ノ大臣貴族等此主ノ威名ヲ天下ニ
釋カサンノヲ欲シテ西ノ方大海ニ傍ヘルカ
ウシユス山ヨリノ東ノ方印度ノ地ノ諸山ニ至
ルニテ皆山頂ニ基趾ヲ築キ成シテ其上ニ彼
勝利得タルノ旗幟ヲ建テ遍テ諸國ヲ統一セ
ルノ威ヲ示シテ其旗幟教千萬里ニ連直セリ

コレヨリノカウカシユスノ一帯直ニ東方印
度ニ至ルノ諸山ヲ世ニ又コレヲ總稱シテカ
ウカシユスト云フ且キユレシユスノ如キハ其所
著ノ地志ニ諸所ノ山川地理多クハ其近辺ノ
山川地理ノ名ヲ混同スルノアリ其印度ノ地
内ニテ諸処ノ南流スル河水ヲハ皆安日ト稱
シ北高海辺ノヤキサルテス河ヲモ亦大乃河
ト稱シ喜ル甘亜ノ地トコルシス國一名トシ
ケレリア國大海ニ近キ國ニハ都見格ニ屬ス
三十五

此地ノ古名ナリ内ナリハシ又河辺ノ山ヲモ
亦皆称カカシユス山ト云フノ類ナリ
カシユス山ハ漢ノ在チ中国者嘉峪关外西錦
五九折入温都斯垣復折而西直達西海不可
峻西南折入温都斯垣復折而西直達西海不可
考宛矣トアル者則又印度斯當又應土私當ニ
作ル即チ印度
別名ナリ

此山甚高峻ニシテ岩石崔嵬絶壁屹立シ其コ
レニ登ルノ路極テ險阻艱危惟僅カニ步行ヲ
通スルノニ山頂ハ皆四時積雪恒ニ覆滿シテ

深サ丈餘ニ及フ此辺ハ土人旅行シテ此山ヲ
過クル者ハ皆我邦ノ旗羅巴シカアチエン氷上
履ニ似タル一種ノ履ヲ踵ミテ疾ク走リテ其
雪上ヲ過キテ急ニ此山頂ヲ越ユコレ何レト
ナレハ其山頂ヤ、モスレハ大風ヲ起メ氷雪
ヲ吹散シ行旅コレカ為ニ雪中ニ埋メラレシ
ヲ防ケバナリ

此山ヲ越テ路程凡ソ三十英里日本ノ七アリ而
ノ時トメ雲生スレハ山中皆烟氣朦朧トナリ恐

尺ヲ辨セサルニ至ル頂上ニハ「マ」トボオム
名茂翳シテ又人ノ居ルナシ而ノ「カル」テイシ
ト云人此山ヲ越ヘシ紀行ニ云ク山中多ハ氣
候安和ナリト凡此山麓ヨリノ頂キニ近キノ
間ハ地甚肥沃ニ多ク諸穀、麥、凝脂、蒲萄、諸果
ヲ出シ又水及ヒ諸畜多シ水ノ如キ亦山泉清
美ニシテ用ヲ飲クナシ其葡萄樹ハ甚高大
繁行人コレヲ摘取シテ夥ク酒ヲ釀ス其味甚
美ニノ其價甚廉ナリ山ニ登ル間ノ多クノ村

邑其人皆木ヲ以テ廬トナス戸毎ニ家口大抵
四五人ニスキス中央ニ火ヲ焚クノ大爐ヲ設
ケ家人皆爐ヲ圍テ繞リ坐ス其婦女穀ヲ末シ
粉トナシテ以テ蒸餅ヲ製ス圓キ石ヲ以テ器
トシコレヲ鑊スル丁深サ二三指直径「テエグ」
蒸餅ヲ造ニ用ルシ煖メテコレニ粉ヲ雜ヘテ
醴酒ノ如キ者ヲ煖メテコレニ粉ヲ雜ヘテ
器ニ納レ其上ヲ覆フニ熱灰熾炭等ヲ以テノ
蒸テ餅トナスト云此中ノ人ハ皆日「アル」日
ノ法教ヲ奉ス人物温良ニノ婦女ハ姿容美麗

ナリ此山辺ノ数処ノ高キ阜上ニ古ノ城地及
ニ寺觀ノ遺趾アリコレ昔シ都兒格トノ戦ノ
時ニ破壊セル者ナリト云又麓ノ所ニ甚肥饒
ナリ山間ノ平地廣ク九三里六日本ノアリテ中
ニ多クノ郭邑アリキユルト云此河其中央ヲ
通ス此河其源ハ此山ヨリ出テ其末ハ北高海
ニ入ル輿地志多ク此河ヲ名ケテセイリス又
アリト云フ梅ニセイリスハ古ヘノ世ノ而
見西亜國創業ノ主ノ名ニシテ西史ヲ按ハスル
見

西亞ノ大業ヲ興セシ吐
脚宇ニアタリテ羅鼻落
國ノ總王アレキ其後九
史ニ云クセイリス切キ
此河大瀾レズ因テ名ク
人ハ此河ヲ呼テカアバ
レバウメン王ノ河ト云
ハ即チセイリスノ別号
ノ史書ニ明カナリ此平
ノ十里ニメ一ノ城アリ
三十八

傍ニ西洋ノ寺觀一ヶ処及ヨオテシ古人ノ如德
喬ノ「セイナガケ」ヲオテシ教法ノ「セイナガケ」ト觀云ク一
ヶ処アリ又此平地ノ一辺ヨリノ凡三里日本
里ノ間ハ其路甚狭クノ一ノ堅固ナル城アリ
「ウスケル」ト云此処ハ廣廿半里一日本ノアリテ
「キル」河ノ右ニアタリテ人居多ク其城ハ岩石
ノ上ニ造築ス此ヲ去ル日本ノニノ山
亦連直スコレ百兎西亜ト都兎格トノ交界
必ナリト云

○「ガリア」河ノ北高海ニ注リ処ニテ多ク金
沙ヲ得ルノ記第十一

「ガリア」河ハ舊時ノ地圖ニ所載多クハ粗畧ニシ
テ詳ナラス近歲ニ至リテ魯西亜ノ人始テコ
レヲ詳ニセリ即其「ガリア」ト名クル者凡ニツ
アリ今其説ヲ下ニ録ス

其一「ガリア」ト名クル者ハ即チ湖水ニナ一者「
ラシオ」又名「シエ」又名「イリハ」又名「ガリア」
キルムト云此湖ノ名ニ因テ其近傍ノ大州ノ

府ヲ亦エリハシト云フ羅甸語ニテハ「エロア」
「ム」ト云フコレ「カ」スタ「ン」ノ大山トシキル
「州」ノ間ニアリ即チ古ヘノ王国「テ」ノ
地ニナ今ハ百兒西亞ノ王ノ郡縣タリ其地四
周都ヲ高山峩々トメコレヲ鏡リ地勢甚險峻
ナリ其「カ」リ「湖」ハ北高海ヲ去ル「凡」二十里
日本ノ「四」アリ「コ」ル「タ」ト云ル河ノ中流ニ注キ
十餘里
コレヨリメ山ヲ越テ北高海ニ注ガナリ
エリハシノ府城ハ彼湖水ヲ去ル「凡」十里日本ノ二十里

一ノ石山ノ上ニ造築シ「セ」キ「イ」ク「セ」ク
ホウラク「ト」云ルニワノ河ニ臨ナリ其旧府ノ
如キハ都鬼格ト百兒西亞トノ連年ノ大戦ニ
因テ破残セリ因テ旧府ノ地ヲ去ル「凡」八百「シ」
ケレエ「シ」一「シ」曲尺五尺五寸ハ日本ナル処ニ
今ノ府城ヲ造建セルナリ亞爾黙尼亞國ノ人
多ク此ニ至リテ夥ク絹帛及ヒ葡萄酒ヲ貿易
ス土人ハ今都ヲ皆百兒西亞ノ産ナリ此地千
五百八十二年日本天正十年ニ百兒西亞ヨリ

伐ヲコレヲ取ル其後千六百二十九年日本寛永六年
明宗禎 = 都児格ノ人再ヒ奪テコレヲ復ス又
其後千六百三十九年日本寛永十六年 = 百兒
西亞人又コレヲ奪ヒ取レリ此等戦争ノ間西
國ノ人代ル々此地ニ占拠シタレ氏此地及ヒ
其他タリア湖ニ金ヲ出スノ一ツ岡カズカ
ルイニト云へル人ノ記行書ニコレヲ詳ニメ
曰ク「エリハン」ノ府ヲ去ル一三日程ニ足ラホ
ル地ニ湖水アリコレヲ百兒西亞人ハ「外リ

ア」シリムト云ヒアル亞ルニア亞ノ人ハ「キアカ
コウニ」ワウト云コレ共ニ皆甘湖ト云ル義ニ
ノ散テ金及ヒ金沙ヲ出スノ一ツ岡カズ因テ
コレヲ訂スルニ其金ヲ出スノ「外リ」ハ則チ
コレトハ別ニシテ韃靼ノ内ニメ止ベ白里ノ後
口南ニ「アタレル」ウスベキノ地ヨリ流レ出
ワルノ河水ニシテ「アウル」スコイ及ヒ「カイ」口
ムノ地ニ至リテ北高海ニ注ク者ナリ則コレ
金ヲ出スノ「外リ」ハ「シキル」ワンノ地ノ「外リ

湖ニ非ナルト明ナリト云々詳ニ次ニ記ス
其二 ガリ ア 河 其事状ヲ詳ニセシノ始ノハ千七
百十五年 日本正徳五年 清コトベテルテ、ガリ 才
テ帝 亞松大臘 甘ノ地ヲ巡狩シテ其間山川地
理ヲ詳ニシ、ガリ ア 河 ノ北高海ニ入ルノ辺ニテ
一二ノ山中ノ物品及ヒ多ク金ヲ出スベキ金
脈ヲ見出セリ此ニ於テ官吏ニ命ジテ心ヲ竭
シテ其金礦ヲ求メシム此時 カ シ イ ン ノ
一王子、ア レ キ サ シ テ ル ベ ツ ケ ウ イ ス ナ ル 者

帝、徳化シ慕ヒテ其地ヲ奉テ魯西亜ニ内附
シ其属國トナラシメテ カ シ イ ン ノ因テ魯西亜ノ貴
族ノ女、カ リ ス ニ ン レ ヲ 娶ル彼等ヲ魯西亜ノ為
ニカシ渴サシメテ カ シ イ ン 欲ス即チ是歲九月ヲ以テ
北高海辺ニ赴キテ土地ヲ経営ス時ニ一ノ金
礦ヲ開キ山中、カ シ イ ン 者ニ命ジテ其妙ヲ得タルノ
礦工、カ シ イ ン レ ヲ 者ニ命ジテ彼ニ議
リ彼ヲ カ シ イ ン レ ヲ 所居ノ成卒ヲ帥テ北
高海辺ノ処ニ殊ニ カ シ イ ン レ ヲ 河辺ヲ尋子探ラシ

ム彼^レシルカ^レイン^レノ王子ノ母亦其本土ノ衆
ヲ養^レコレ^レヲ助^ケテ其功^ヲ成^サシメント欲
ス

ナリ^テ河ハ加^カル^ル誤^ル然^ルノ地内ニ其源アリテコレ
ヨリノ流^レテ北高海ノ北辺ニ至^リテ此海ニ
注^グ其岩石ノ間ニ金脉アリテコレヨリシテ
水ニ流^レ入^ルノ金沙甚夥シ然^レ長^ク從來未^ダ
此河ニ通^セズノ加^カル^ル誤^ル然^ルノ人ト交易スルニ
彼地ノ貨^ヲ河^ヲ流^ヨリシ^テ北高海ニ輸^レコレ

ヨリ大魯西^ニ並^ニノ本國ニ輸^ステ能^ハズノ惟陸
路ヨリノ貨^ヲ通^スルノミナ^リカ故ニ運送多
ク難^クナリシナリ今若舟ヲ泛^メテ此河ニ通
スル^ハ惟^ニ其金沙ヲ採^得テ國用ノ益^ヲナス
ノミナ^リス^ルノ^ミ人及^チ印度地方ノ
人ト貨物ヲ貿易スルノ捷路ヲ開^キテ其利潤
亦大ナルヘキナリ是ニ於^テ彼^レシルカ^レイン^レ
ノ王子^ハハ^ッケ^ウイ^ス詳^ニ北高海辺ヨリ此河辺
ノ國ヲ示^シテ魯西^ニ並^ニノ官府ニ進^メ即^チ先^シ

准噶尔
自生盐

此河曰二小城ヲ築キ成卒三百人ヲ置キテ加
ル漢人ノ不意金沙ヲ採ルノ妨ヲ十廿二
丁ヲ防グ彼加尔漢人ノ元来亞松大臘甘
ノ地ニテ交易ヲナス丁稀ニシテ多クハイル
チス河ニ傍テ止白里ノ府城トホルスキノ地
ニ至リテ互布ヲ十シ茶及ヒ支那ヨリ所出ノ
種々ノ段足殊ニ多ク鹽ヲ携ヘテ止白里ヨリ
所出ノ諸種ノ皮革ニ換工其鹽ノ如キハ皆加
爾漢人ノ地内ハ教所ノ河ニ産スル者ニ大塊

ヲ成シテ水上ニ浮散スルヲ採得心所ニシテ
其性甚佳ナリ而シテ魯西亞ノ帝加尔漢人ノ地
君長一十ヲス其人性騷擾ニシテ常ナク又彼鹽
ヲ出スノ利アリヲ以テ其大將入尔馬泥亞國
ノ人ヲガウクホルツ及ヒ馬歩ノ軍卒ノ指揮使
三員ヲノ兵ヲ帥テ止白里ノ境ヲ離ル、丁百
五十里而餘里ニシテ加尔漢人ノ地ノ中央其
鹽ヲ産スルノ地ニ入テコレニ換リ城郭ヲ築
キ其地ヲ経略シ其民ヲ教諭シコレヨリノ每

年トボルスキニ於テ十セシ加尔護院人ノ互
市シ此処ニ遷シ次第ニ地ヲ開キテ内外ヨリ
メ、ダリア何ニ通スルノ路ヲ開カレトス
彼鐘エ、ブルウイユル又帝ノ命ヲ受テ彼シルカ
シイシノ王子、ベツケウスト共ニシルカシイシ
ノ地ノ諸山ヲ巡檢シテ鐘アル処ヲ求ム其地
ニ居ル処ノ韃人コレニ銀山アルコトヲ告ク
其山冬月ハ氷雪覆滿ス即此山ヲ搜シテ銀坑
ヲ得タリ銀ヲ採ル極テ夥シク其他多ク山

中ノ物品ヲ得テ大ニ國用リ益ヲ致セリ、ベツ
ケウイユ詳ニコレヲ奏メ帝ニ進メテ其餘ヲ
聽ク

止^レ白^ハ里^イニ所居ノ魯西亜ノ貴族總兵官^{カガリ}

亦帝ノ命ヲ受ケテ北高海ノ東辺ヲ巡行シテ

撒^ハ馬^ル兒^ル罕^ル國ノ邊ニ至ル此國ハ古ハ「ゴロオテ

録^レ木^ル見^ル干^ル出^ルセシ知ナリ、國ハ人ニラシハ將此

日^リ身^ヲ破^リ起^シ後^ニ東^ニ骨^ヲ飽^ム倫^ニ度^ヲ百^ニ見^ル西^ニ破^リ減^ル現^ル格^ヲ
其^ノ地^ニ帝^ノ年^ヲ起^シ業^ヲ起^シ即^チ我^ノ國^ニ應^ズ永^シ一^ノ年^ヲ明^ク
千^ニ四^百零^四年^ニ殂^ス即^チ我^ノ國^ニ應^ズ永^シ一^ノ年^ヲ明^ク

四十五

唐一
嗜、林

永樂二年三月廿三日
十加一上ニ詳ニ記ス
ムト加一上ニ詳ニ記ス
石數種ヲ得タリ又止白里ヨリメ此ニ至ルノ
間ニテ地ヲ掘リテ銅ヲ以テ鑄成セル種々ノ
甚古キ奇異ナル像ヲ多ク得タリ、かがりニ悉
クコレヲヘテルス、ブルガニ送リテ帝ニ獻ス
コレ皆古ヘノ世ニ此辺ノ地ニテ崇奉セル所
ノヘイテニ教門種々ノ神像ヲ設ケテ如意吉
ニ所用ノ神像ナリ其像或ハ半身ハ人ニメ半

身ハ牛或ハ馬ナルモアリ或ハ全ク牛ノ形ナ
ルアリ或ハ鷲雁ノ類ノ形ナルアリ或ハ奇怪
醜陋ナル男子ノ形ナルアリ或ハ少年ノ婦女
ノ形ナルアリテ種々一十ラズ而シテ其初メ何
ノ物ヲ用テ董シタルニヤ其像ハ極テ古クメ
久シク土中ニ埋レタリト雖モ其香甚強クメ
恰モ麝香ヲ用ヒタルニ似タリ又其手ニ燈
燭ノ類ヲ點セシ痕亦儼然トシテ存ス則此辺
ノ地古ヘノ世ニハ「ヘイテニ」教ヘテ奉セシ

了亦明白ナリ而ノ其鷺雁ノ像ノ啄ノ上下及
ヒ其羊人平馬ノ像ノ背ノ上下又ハ其舌ノ中
央ニ偷カニ孔ヲ穿テ鉤鏤ノ類ヲ設ケコレニ
連テテ口中ニ管ヲ設ケリコレ古一ノ時此寺
ノ像ヲ彼宗法ノ寺觀ニ飾リ設ケテ其地ノ愚
昧惑溺ノ士民寺ニ來リテ彼像ヲ禮拜供養シ
テ誠心ニ如意吉祥除厄消災等ノ事ヲ祈ルト
キハ其寺僧偷カニ其像ノ内ニ藏レテ彼管ヨ
リノ音異ノ音ヲ出シ其愚人等ヲ欺誑シテ

種々ノ詐偽奸曲ノ事ヲナセシナリ又其像上
ニ多クノ經文ヲ刻セルアリ其義ハ多ク詳ナ
ラズト雖比其文字ハ即チ其中ニ間々百鬼面
面國及ヒモレガレシ像ヲ古クニテ通行スル所
ノ文字ト相同シキ者アリシト云フ而メ彼ノ
貴族「かがリシ」コレヨリメ「ガリア」河辺ニ至リ
テ其金沙ヲ尋テコレヲ採リ得ル「極」テ彩
シクシテ勝テ計フベカラス悉クコレヲ「ベ」テ
ルスブルクニ輸送ス即チエニ命メコレヲ

別タシムルニ金ノ多キ一沙ニ教倍ス大抵沙
一斤二斤八分此方ノ百ノ内ニ於テ金百八錢計
ヲ得タリコノ時所得ノ金甚多クノ實ニ國家
ノ一益ヲ得ル是ニ於テ「シルカシイン」ノ王子
又此事ヲ議シテ尚其河源ヲ探ラニ「帝」
奏ス

「シルカシイン」ノ王子彼河源ヲ極メ「帝」ヲ欲シ
テ北高海邊ニ二处ノ陣營ヲ増シ築キ兵ヲ分

